

— NO207 4月号

FOREST NEWS

未来を守る木を植える
未来を育てる木を植える



2025年度 指標

- ①パンタナール地域における潜在自然植生の混植密植形式の植樹の実施
- ②国内において累計 500 本の植樹活動
- ③植樹を通じた環境問題解決のロールモデルをつくる
- ④セミナー や植樹祭を通じて「家族で木を植える」文化の啓蒙
- ⑤混植密植の植樹を推進する他団体との連携



韓国南東部の山火事では23,000人以上が避難している

理事長メッセージ

山林火災ストップは「燃えやすい針葉樹」を 「燃えない 広葉樹」に植え替えることから！

韓国南東部で3月21日発生した山火事は10間燃え続け、死者30人、焼失面積4万8千ha（東京23区の四分の三）という過去25年で最大規模となりました。原因は大船渡の場合と同じ乾燥と強風によるものとみられます。複数のメディアの映像から、主にマツが燃えたのが確認できました。

マツの植林は日本では昔から瀬戸内海沿岸地域でも盛んに行われ、やはり春先の乾燥と強風による山火事を度々起こしてきました。特に中国地方では、自然状態の250倍にもおよぶマツが植えられた結果、マツクイムシの被害でマツの山林全体が立ち枯れ、小さな火種で大規模火災を発生させる原因となっています。

戦後より続けられた全国規模の拡大造林で過剰に植え過ぎた針葉樹林の火災をストップさせる方法は次の通りです。

①国有林、私有林ともスギやマツを伐採し、その場に山の斜面と直角に横たえる。

②時間の経過とともに降雨時に倒木が落ち葉や土砂をとどめ、棚状の土壤ができるのでそこに広葉樹の苗を混植・密植する。

③苗は15年から20年で成木となり、関西以西は常緑広葉樹、以北の東北、北海道は落葉広葉樹の森が育つ。

あとは自然の管理に任せることで安定した広葉樹の森が、次の氷河期がくるといわれる9千年まで持続します。つまり、各個体は寿命が尽きても、後継樹が育つため、世代交代を繰り返しながら安定した森が持続するということです。

また、シイノキ、カシノキ、タブノキのような広葉樹は、野生動物の餌となるドングリを実らせるため、クマ、シカ、イノシシなどが里に降りてきて食害をもたらすということも防げます。だからといって針葉樹をことごとく悪者にするということではなく、木材資源としては貴重な樹種なのでバランスを考えて植えるということです。

— パンタナールの自然林再生 混植密植樹活動の取組み

自然の森の力を活かすマウンド作り

当法人がパンタナールで行ってきた植樹活動は、過去植えた樹木の約2/3が枯れてしまったという苦い経験があります。その対策として今回取組むのが「マウンド作り」です。

自然の森をよく観察すると、地面は平坦ではなく、小さな丘や窪みが複雑に入り組んでいます。この地形こそが、多様な植物の生育を支え、森全体の安定につながる鍵になります。宮脇式植樹法では、この自然の理にかなった地形を人工的に再現するために、植樹前に土を盛り上げてマウンドを作ります。



マウンド作りをする意味

①水はけの改善

マウンドは余分な水分を速やかに排出し、根が健全に呼吸できる環境を整えます。

②保水性の向上

マウンドの内部には、有機物や落ち葉などが蓄積されやすく、これがスponジのように水分を保持します。乾燥期においても、苗木はゆっくりと水分を吸収できるため、生育不良を防ぎます。

③多様な生育環境の創出

マウンドの上部、斜面、麓といった微地形の違いは、日当たりや水分の保持量に微妙な変化をもたらし、様々な種類の植物がそれぞれの適した場所で生育することが可能となり、生物多様性に富んだ、より自然に近い森が育れます。

④根の伸長と安定性の向上

柔らかく耕されたマウンドの土壤は、苗木の根が自由に伸びるスペースを与え、しっかりと大地に根を張ることを助けます。これは、強風や豪雨などの自然災害に対する森の抵抗力を高める上で不可欠です。

今回のレダ現地でマウンドつくりは、マウンド内にヤシの木をいれてその上に盛土をする予定です。

パンタナール・レダの植樹モデル： 高木、亜高木、低木、草本層の4層からなる多層群

高木：ケブラッヂョ・パラサント・パラボラーチョ・ラパーチョ・ジャカランダ・他
 亜高木：マンゴー・アボガド・ニーム・モリンガ・パラゴムノキ・グアバ・パパイヤ
 低木：バナナ・コーヒーノキ・コショウ・レモン・アセロラ・ブルメリヤ・キャッサド
 草木：パイナップル・ランタナ・サボテン



国内植樹のページ

「トヤマ平成の森植樹会」の準備に参加してきました

(株)トヤマは日本で有数の放射光関連機器メーカーで、神奈川県山北町の本社・工場周囲に、宮脇昭先生（横浜国大名誉教授）のご指導による自然の森「トヤマ平成の森」を創出されています。

今回の植樹祭の経緯

(株)トヤマの工場周囲で宮脇先生の指導のもと、初めて植樹祭が開催されたのは2013年12月です。当時、新工場建設予定地である神奈川県山北町の丸山山頂において、1200本の苗木を植える植樹祭が開催されたのを皮切りにその後2015年の3年間に合計22,222本の苗木を植樹しました



今回は、植樹完了から10年が経過した苗木たちの様子を見てもらうと共に、同社の広大な敷地内を通る道路沿いに、21種類457本の苗木を植える植樹会が企画されました。

当日は生憎の雨天でしたが、地元の皆様、ボランティアの方々が加わり、混植・密植による植樹を行いました。



当日の植樹祭の様子

植樹の準備段階における経験と学び

2025年、緑の会主催の植樹祭（能登・千葉）の開催に向けて、植樹祭スタッフを手伝いながら学んだ内容を整理し、まとめました

1. 計画と準備の重要性

植樹を行う場所の特性（土壌の質、地形の状況、気候条件等）を現場に赴き、調査することは重要です。それらに適した樹種を選定することが、植えた木々の健全な成長につながります。準備に携わり「ここまで調べているのか..」と思うことが多々ありました。

2. 地域団体との連携

地域の人々が植樹活動に積極的に関わることで、植樹への理解が深まり、活動の継続性が確保されます。当法人の取組みと地元団体がよくコミュニケーションをとり、信頼関係を作ることで植樹後の生育管理のモチベーションに繋がります。地元団体の中に主体的な動機をもって植樹活動に参加してもらえるかが成功の鍵になることが分かりました。（計画が頓挫することもあるそうです）

3. 専門家との連携

計画段階から土壌改良や植樹後の生育管理について専門的なアドバイスを受けることで、より健全な森林づくりが可能になります。

今回は、植樹祭準備の段取りを担当しているエスペックミック（株）高野様から直接アドバイスを頂きました。当法人が植樹する際も現地調査、設計、計画、樹種リスト検討などをサポートしていただく予定です。



植樹祭準備の現場